

## 聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅴ

### 第1回 誘惑が人の心を支配する構造

これまでのシリーズを通して、誘惑の存在とその結果としての支配、そして自由の本質について考察してきました。

本章からはさらに踏み込んで、誘惑がどのように人間に働きかけるのか、その構造に焦点を当てていきます。

ここで明らかにすべき最も重要な点は、誘惑とは外部から一方的に与えられるものではなく、人間の内面と結びつくことによって成立するという事実です。

#### 1 誘惑は心の欲と結びついて初めて成立する

ヤコブは、「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。」（ヤコブ1章14～15節）と述べています。

このみ言は、誘惑の本質を明確に示しています。すなわち、誘惑の原因は外部にあるのではなく、人間の内にある欲にあるのです。

ここで重要なのは、「引かれ、さそわれる」という表現です。これは強制ではなく、内側からの反応を意味しています。

どれほど強い刺激が外から与えられても、それに応答する要素が内面に存在しなければ、誘惑は成立しません。逆に、内面にその要素がある限り、人は常に誘惑にさらされることとなります。

したがって、誘惑の問題は環境ではなく、内面の状態にあります。この視点の転換こそが、誘惑を理解するための出発点となります。

#### 2 創世記に見る誘惑の原型

この構造は、創世記に記された最初の誘惑において、すでに明確に示されています。

蛇はエバに対して、「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」（創世記3章5節）と語りました。

この言葉はただの情報ではありません。エバの内面にあった「より高くなりたい」「神のようになりたい」という欲求に触れることによって、初めて力を持ちました。

その結果、エバはその実を「食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ま

しい」（創世記 3 章 6 節）ものとして認識しました。

ここで明らかになるのは、誘惑とは外から押し付けられるものではなく、内面の欲求と結びつくことによって、自分の中で正当化されるものだという点です。

### 3 誘惑を成立させる三つの内的要素

この創世記の記述とヤコブの言葉を合わせて考えると、誘惑は欲望だけでなく、より複合的な内面構造によって成立していることが分かります。本章ではそれを三つの要素として整理します。

第一は「欲望」です。これは「食べるに良い」と感じた部分に対応します。すなわち、生存や快樂に関わる基本的な欲求です。

第二は「承認欲求」です。「神のようになれる」という言葉は、自己を高めたい、他より上に立ちたいという欲求に訴えています。これは単なる欲望ではなく、自己評価に関わる深い欲求です。

第三は「恐れ」です。蛇は「神は知っておられるのです」（創世記 3 章 5 節）と語ることによって、神が人間にとって本当に必要なものを与えておられないかのような印象を与えています。

蛇の「神は知っておられるのです」という言葉は、「知っておられるのに、なぜ神はその木の実を禁じておられるのか」という疑念をエバの内に植えつけるものでした。

この疑念が神への不信へと転じ、「神は本当に自分を愛しておられるのだろうか」という恐れを生み出すのです。

すなわち、神への信頼が揺らぐことによって、人は神から与えられるのを待つのではなく、自ら得ようとする方向へ導かれていくのです。現代においても、このような恐れは誘惑の大きな動機となります。

このような神への不信から来る恐れは、人が本来あるべき愛の関係から離れた状態を示すものです。ヨハネは、「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く」（ヨハネの第一の手紙 4 章 18 節）と述べています。

このみ言が示しているように、恐れとは、本来の愛と信頼の関係から離れたところに生じるものであり、誘惑の土台として働くことが聖書の観点からも確認することができます。

以上のような三つの要素——欲望・承認欲求・恐れ——が結びつくとき、誘惑は非常に強い力を持つようになります。

## 4 外部刺激と内面の結合構造

そして誘惑は、外部の刺激と内面の要素が結びつくことによって成立します。外部刺激だけでは人は動きません。また、内面の欲求や恐れだけでも、直ちに具体的な行動に至るわけではありません。

この両者が結びついたとき、初めて人は引き寄せられ、判断を変え、行動へと導かれます。

創世記の例で言えば、「神のようになれる」という蛇の言葉（外部刺激）が、エバの内に生じた「神から与えられるのを待つのではなく、自ら得ようとする思い」（内面の要素）と結びついたとき、誘惑は実際の行動へと人を誘導する力を持ちました。

ですから、誘惑は単なる外部からの働きかけではありません。人間の内面にある欲求や恐れ、そして神への不信と結びつくことによって成立するものです。

この構造を理解しない限り、人は誘惑を単に「環境の問題」と考え続けることになります。しかし聖書は一貫して、問題の根が外部ではなく、人間の内面にあることを示しています。

したがって、問題の解決もまた、単に外部を排除することではなく、内面を整え、神との関係を回復することに向けなければなりません。

## 5 誘惑とは支配へ向かう構造

ここまで見てきたように、誘惑は単なる外部からの働きかけではありません。それは、人間の内面にある欲望や承認欲求、そして恐れと結びつくことによって、人の思考と行動に影響を与えるものです。

そして聖書は、この誘惑が単なる一時的な出来事では終わらないことを示しています。

ペテロは、「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」（第一ペテロ5章8節）と述べています。

ここで示されているのは、悪が人間を一度限りではなく、繰り返し誘惑し、機会を狙い続けているという事実です。

誘惑はまず思考に働きかけ、次に判断を変え、その結果として行動を繰り返させます。そして、その行動が積み重なることによって、やがて人間の性質そのものを変えていきます。

このように、悪の誘惑とは単なる試みではなく、人間を内面から支配へと引き込み、最終的には自由を失わせていく構造なのです。

## 6 神に対する信頼を取り戻すことが解決の道

以上のことから明らかなように、誘惑に対する本質的な対処は、単に外部の刺激を避けることではありません。もちろん環境の影響を軽視することはできませんが、問題の根は人間の内面にあります。

したがって、本当に必要なのは、自分がどのような欲求や恐れに動かされているのかを見極め、その内面の方向を正すことです。

特に重要なのは、神に対する信頼の回復です。創世記における誘惑もまた、「神は本当に自分を愛しておられるのか」という疑いから始まりました。

神に対する信頼が揺らぐとき、人は神から与えられるのを待つのではなく、自らの力で欲望を満たそうとする方向へ向かいます。

したがって、誘惑の問題は単なる行動の問題ではありません。それは、人間が何を信じ、何に従って生きるのかという、内面そのものに関わる問題です。

この信頼の回復について、詩篇はこのように歌っています。「主はわたしの光、わたしの救だ、わたしはだれを恐れよう。主はわたしの命のとりでだ。わたしはだれをおじ恐れよう」（詩篇 27 篇 1 節）。

神を光として生きるとき、恐れを動機とした誘惑の入り込む余地は失われていくのです。

## 7 まとめ

以上見てきたように、誘惑は、人間の内面にある欲望や承認欲求、恐れと結びつくことによって成立します。

したがって、誘惑との戦いは、単なる環境との戦いではなく、自分の内面が何に従って生きているのかをめぐる戦いです。

この構造を理解することは、外部に流されるままに生きるのではなく、主体的に生きるための出発点となります。

今回は、この内面支配の具体的な入り口の一つである甘言と美辞が、どのようにして人間の承認欲求に働きかけ、支配を成立させるのかについて、聖書の観点からさらに詳しく見ていきます。

## 第2回 承認欲求による支配

前回は、誘惑が外からではなく内面と結びつくことによって成立する構造を見ました。

本章では、その内面に働きかける具体的な手段の一つとして、「甘言と美辞」に注目します。

これは単なる言葉の問題ではなく、人間の深い欲求に触れることによって支配を成立させる重要な入口です。

聖書はこの点について極めて明確に警告しています。

### 1 甘言と美辞は人の内面に働きかける

パウロは、「こうした人々は、わたしたちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞とをもって、純朴な人々の心を欺く者どもだからである」（ロマ書 16 章 18 節）と述べています。

ここで言われている「甘言と美辞」とは、単に聞こえの良い言葉ではありません。それは人の心を動かし、判断を変えさせる働きを持つ言葉です。

重要なのは、「心を欺く」とある点です。すなわち、問題は言葉そのものではなく、それが内面に入り込み、認識や判断を歪めることにあります。

甘言と美辞は、外側から強制するのではなく、内側から納得させる形で人を動かします。

### 2 なぜ人は甘言と美辞に弱いのか

では、なぜ人はこのような言葉に影響されるのでしょうか。その理由は、人間の内にある「承認欲求」にあります。

人は自分が認められたい、価値ある存在として見られたいという欲求を持っています。この欲求自体は否定されるものではありませんが、それが無自覚のままに刺激されるとき、判断を誤りやすくなるのです。

箴言は「隣り人にへつらう者は、彼の足の前に網を張る」（箴言 29 章 5 節）と述べています。

ここで「網を張る」とは、必ずしも意図的な罠を指すものではありません。人の承認欲求を刺激する言葉が、結果として相手の判断を狂わせるという、構造的な危険性を指しています。

すなわち、甘言や美辞が単なる好意ではなく、相手を捕らえるための仕組みとして働くという事実です。

甘言と美辞は、人間の内面にある欲求を利用することによって、支配の入口を

つくり出すのです。

### 3 評価への依存が支配を可能にする

甘言と美辞が力を持つかどうかは、人がどれほど他者の評価に依存しているかによって決まります。

もし人が自らの価値を外部の評価によってのみ測っているなら、その評価を操作されることによって、容易に支配されてしまいます。

この意味で、承認欲求そのものが問題なのではなく、それに対する依存が問題です。

外から与えられる評価が判断の基準となると、人は自ら考えることをやめ、他者の言葉に従うようになります。

パウロもまた、「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい」（ガラテヤ1章10節）と述べています。

ここで示されているのは、人の評価を基準として生きるとき、判断の基準そのものが他者に支配されやすくなるという問題です。

すなわち、承認欲求への依存は、単なる感情の問題ではなく、人間の主体性そのものに関わる問題なのです。

### 4 甘言と美辞は支配の入口

甘言と美辞は、直接的に人を強制するものではありませんが、それは内面に入り込み、思考の方向を変え、判断を歪めることによって、最終的には行動を支配します。

前回の記事で見たように、誘惑は外部刺激と内面の結合によって成立します。

甘言と美辞は、その外部刺激の中でも、特に人の内面に入り込みやすい特徴を持っています。なぜなら、それは命令や強制ではなく、人を認め、持ち上げるような肯定的な言葉の形をとるからです。

人は否定や攻撃に対しては警戒しますが、自分を認めてくれる言葉に対しては無防備になりやすい傾向があります。

そのため、甘言や美辞は承認欲求に深く入り込み、判断を揺さぶる力を持つのです。

このような言葉が自分の承認欲求に働きかけていることに気づかないとき、人は自ら進んで支配の中に入っていきることになります。

## 5 真の自由は評価からの解放にある

イエス御自身も、荒野でサタンの甘言に対して、あらゆる言葉の中で何を判断の基準とするかを明確に示されました。

イエスは「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ福音書 4章 4節）と語られています。

この言葉は、外から与えられる評価や言葉ではなく、神の言葉こそが人間の基準であることを示しています。

そして、パウロは「どんな境遇にあっても、足ることを学んだ」（ペリピ 4章 11節）と述べています。

ここでパウロが語っているのは、外的な条件によって自分の価値や平安が左右されない状態のことです。

人は内面の安定を外部に依存しているとき、評価や賞賛によって容易に揺さぶられるようになります。

しかし、自らの存在の根拠を神との関係の中に持つとき、外部の評価によって支配されにくくなるのです。

他者の甘言にも批判にも揺さぶられないこのような姿勢が、評価依存から解放された具体的な姿です。

## 6 まとめ

甘言と美辞は、人間の承認欲求に働きかけることによって、内面から支配を成立させる手段です。それは強制ではなく、受け入れやすい形をとるため、非常に見抜くのが難しく、かつ強力に作用します。

人は、「もっと価値ある存在になりたい」「他者より高く認められたい」という欲求を通して、容易に判断を揺さぶられます。

創世記においても、蛇は「神のようになれる」という言葉によって、エバの承認欲求に働きかけました。

したがって、甘言や美辞が自分の承認欲求に働きかけ、判断を揺さぶっていることに気づかない限り、どれほど環境を整えても、誘惑から完全に自由になることはできません。

今回は、「失敗と挫折」がどのようにして人を思考停止と惰性へ誘導するのか、その構造について聖書の観点から見ていきます。

## 第3回 失敗と挫折が思考停止に誘導する仕組み

前回は、甘言と美辞が承認欲求に働きかけることによって、人の内面から支配を成立させる構造を見ました。

本章では別の側面として、「失敗と挫折」がどのように人間の思考を停止させ、惰性的な状態へと誘導するのかを考察します。

### 1 繰り返される失敗が心に与える影響

人間は失敗を経験する存在ですが、その影響は単なる一時的なものにとどまりません。特に、それが繰り返されると、内面には深い変化が生じます。

努力しても思うような結果が得られない状態が続くと、人は次第に希望を失い、「どうせ変わらない」という感覚を持つようになります。

最初は前向きに挑戦していたことであっても、失敗を重ねるうちに期待することをやめ、やがて挑戦そのものを避けるようになるのです。

このとき、人間の思考は積極的に働くことをやめ、現状に留まることが安全であると判断するようになります。そして、この状態が続くと、自ら考え、選択し、行動しようとする力そのものを弱めていきます。

このように、失敗が繰り返されることによって、人間の内面に諦めや無力感を形成し、やがて「自ら考えることをやめ、現状を問い直す力を失った状態」——すなわち思考停止へとつながっていくのです。

### 2 絶望と惰性的関係

この状態が進むと、人は単に落胆するだけでなく、惰性的な状態へと移行します。

惰性とは、積極的に何かを選ぶのではなく、ただ流れに任せて生きる状態です。一見すると安定しているように見えますが、実際には主体的な判断が失われています。

失敗によって生じた失望が長く続くと、人は「どうせうまくいかない」という前提で物事を見るようになります。

このとき、思考は可能性を探るのではなく、「今のままで仕方がない」と現状を正当化するようになります。これが思考停止の状態です。

### 3 失敗は支配の手段となり得る

この構造で重要なのは、失敗そのものが問題ではなく、それがどのように受け

止められるかという点です。

もし失敗によって「自分にはできない」「自分は変わらない」と考えるようになれば、人は次第に挑戦することそのものを避けるようになります。

そして、この状態が繰り返されると、失敗は単なる経験ではなく、人を諦めへと誘導する支配の手段として働くようになるのです。

繰り返される挫折は、人に「どうせ変わらない」という感覚を植えつけ、やがて自ら考えることさえ放棄させていきます。

このとき、人は外からの強制によってではなく、「どうせ自分にはできない」「挑戦しても意味がない」という内面の思いによって、自らを制限するようになります。

すなわち、支配は単なる外部からの拘束ではなく、人間の内面の中に確立されていくのです。

#### 4 聖書が示すもう一つの道

しかし聖書は、失敗に対してまったく異なる見方も示しています。

箴言には「正しい者は七たび倒れても、また起きあがる」（箴言 24 章 16 節）とあります。

聖書において「七たび」とは文字通りの回数ではなく、何度繰り返しても、という意味を持つ表現です。

このみ言は、失敗が終わりではなく、繰り返し立ち上がる過程の一部であることを示しています。

ここで重要なのは、倒れることそのものではなく、再び立ち上がることです。つまり、失敗すること自体が問題なのではなく、それにどう対応するかが問われているのです。

#### 5 失敗は成長の契機にもなり得る

さらにパウロは、「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す」（ロマ書 5 章 3～4 節）と述べています。

ここには、苦しみや困難が内面を鍛え、最終的には希望へとつながる過程が示されています。

このように理解すると、失敗は否定的な出来事ではなく、人間を成熟へと導く機会となります。

ですから、同じ出来事であっても、それをどのように解釈するかによって、結果はまったく異なるものになるのです。

## 6 失敗に対する解釈がその後を決定する

以上のことから明らかなように、失敗には二つの意味があります。

一つは人を諦めと惰性へ導く支配の手段としての意味、もう一つは人を成長と希望へ導く契機としての意味です。この違いを生み出すのは、出来事そのものではなく、それに対する解釈です。

人は失敗そのものによってではなく、それをどう解釈するかによって、その後の判断や行動が左右されます。

もし失敗を終わりと解釈すれば、思考は停止し、行動も止まります。しかし、それを過程と理解するならば、人は再び立ち上がり、前に進むことができます。

## 7 まとめ

失敗と挫折は、人間を思考停止と惰性へ導く強力な要因となり得ますが、それは出来事そのものの力ではなく、それに対する解釈を通して作用します。

したがって、人間を支配するのは失敗ではなく、失敗に対する理解のあり方です。

同じ失敗であっても、それを絶望として受け取るか、成長の過程として受け取るかによって、人の歩む道は大きく分かります。

この意味において、誘惑との戦いは出来事との戦いではなく、それをどう理解するかをめぐる戦いと言えます。

今回は、「プロパガンダと思想支配」がどのように人間の思考そのものを形成し、見えない形で支配を成立させるのかについて考察します。

## 第4回 プロパガンダと思想支配

前回は、失敗と挫折がどのように人間を思考停止へと誘導し、惰性的な状態を生み出すのかを考察しました。

本章ではさらに進んで、「プロパガンダ」と呼ばれるもの、すなわち社会や情報を通して形成される思考の枠組みが、どのように人間を支配するのかを考察します。

### 1 環境の影響を受ける思考

人間の思考は、完全に独立したものではありません。日々接する言葉、情報、価値観、社会的空気などによって、知らず知らずのうちに形づくられていきます。

何を正しいと感じるか、何を当然と思うかといった判断の基準は、こうした環境の中で形成されます。この意味において、思考は中立的なものではなく、常に何らかの影響を受けています。

問題は、自分がその影響を受けていることを自覚しているかどうかです。その自覚がないとき、人は外部から与えられた価値観や判断基準を、自分自身の考えであるかのように受け入れてしまいます。

しかし実際には、それらが周囲の環境や情報によって形づくられたものである場合があります。

### 2 無意識の同調が支配を成立させる

プロパガンダの本質は、強制ではなく同調にあります。人は露骨な強制に対しては抵抗しますが、多数の意見や社会的常識として提示されるものには、自然と従いやすくなります。

このとき、自分で判断しているつもりで、実際には環境に適応しているにすぎません。

この無意識の同調が積み重なると、人は自ら考えることをやめ、与えられた枠組みの中でしか物事を理解できなくなるのです。

その結果、思考の自由は徐々に失われていき、ここに外から見えにくい形での支配が成立します。

たとえば、特定の言葉や概念が繰り返しメディアや教育の場で使われると、やがてそれが自明の真理として受け取られるようになります。

強制されたのではなく、自然に同意した形をとるため、同調していることに気づきにくいのです。

### 3 聖書が語るこの世への同調

パウロは、「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（ロマ書 12 章 2 節）と述べています。

ここでパウロが警告しているのは、この世の中で形成される価値観や考え方に、人が無自覚に従ってしまうことです。

人間は社会の影響を受けながら生きているため、周囲の考え方や常識を繰り返して受け取るうちに、それを当然のものとして受け入れるようになります。

しかし、そのようにして形成された基準が必ずしも真理に基づいているとは限りません。

そのため、外面的には正しい行いをしているように見えても、その判断基準そのものが歪んでいるならば、結果として誤った方向へ進むこととなります。

このみ言が示しているのは、人が誤った方向へ進んでしまう原因が、単なる行動ではなく、思考や価値判断のあり方にあるということです。

したがって、必要なのは表面的な行動を修正することではなく、人間の内面にある思考そのものが刷新されることです。

### 4 「思い」をめぐる戦い

パウロはさらに、「神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」（コリント人への第二の手紙 10 章 5 節）と述べています。

この言葉は、信仰が単なる感情や習慣ではなく、思考の領域における悪との霊的な戦いであることを示しています。

ここで言われている「思い」とは、一時的な考えではなく、判断の基準となる枠組みそのものです。

この枠組みがどこに従っているかによって、人間の生き方が決定されます。したがって、今の自分の思考がどのように形成され、何に支配されているのかを見極めることが不可欠です。

### 5 現代における誘惑の高度化

現代社会では、情報の量と速度が飛躍的に増大しています。ニュース、広告、教育、娯楽など、あらゆる領域から絶えず情報が流れ込み、人間の思考に影響を与えています。

このような環境では、特定の価値観や考え方が繰り返し提示されることによって、それが当然のものとして受け入れられていきます。

この過程で、自分の考えがどこから来たのかを意識することが難しくなるのです。箴言はこのような状態を端的に示しています。

「思慮のない者はすべてのことを信じる、さとき者は自分の歩みを慎む」  
(箴言 14 章 15 節)

その結果、外部から与えられた枠組みが内面に取り込まれ、自分自身の思考として機能するようになります。これが現代における誘惑の高度化の特徴です。

## 6 まとめ—見えない支配との戦い

プロパガンダと思想支配は、外的な強制によってではなく、人間の思考や価値判断に影響を与えることによって成立します。そのため、この影響は非常に見えにくく、気づかれにくい特徴を持っています。

人は外から命令されれば抵抗しようとはしますが、自分自身の考えと思っているものに対しては疑いを向けにくくなります。

そのため、思想支配の問題は単に誤った情報を受け取るのではなく、その影響を受けていることに気づかないところにあります。

したがって、誘惑との戦いは単に行動を抑えることではありません。それは、自らの判断基準が何によって形づくられているのかを問い続ける戦いです。この意味で最大の戦場は行動ではなく「思い」の領域です。

今回は、「惰性からの脱却」という観点から、主体的な信仰がどのようにして思考と行動を回復させ、真の自由を確立していくのかを考察します。

## 第5回 惰性からの脱却

前回は、プロパガンダと思想支配がどのようにして人間の思考そのものを形成し、見えない形で支配を成立させるのかを見ました。

本章では、その結果として生じる「惰性」という状態に焦点を当て、そこからどのように脱却し、主体的な信仰によって真の自由に至るのかを考察します。

### 1 惰性とは

惰性とは、単に怠けている状態ではなく、自ら考え、判断し、選択することをやめ、周囲の流れや習慣に身を任せている状態です。

このとき人は、自分で決めているように見えて、実際には外部の影響や過去の習慣によって動かされています。

この状態の特徴は、思考の停止と判断の放棄にあり、何が正しいかを吟味することなく、既に与えられている価値観や環境に従って生きています。

そのため、外見的には安定しているように見えても、内面的には主体性が失われているのです。

### 2 主体性と信仰の関係

聖書は、信仰を単に言われたことを受け入れるだけのものとしては描いていません。むしろ、それは主体的な判断と選択を伴うものです。

パウロは、「すべてのものを識別して、良いものを守り、あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」（テサロニケ人への第一の手紙5章21節）と述べています。

ここで求められているのは、与えられたものをそのまま受け入れることではなく、それを識別し、自らの判断によって選び取る姿勢です。

これは、信仰が思考を放棄することではなく、むしろ思考を回復させるものであることを示しています。

### 3 恐れからの解放と意志の回復

しかし、何が正しいかを識別できたとしても、それだけで正しく行動できるとは限りません。惰性の背後には、しばしば恐れという別の問題が存在します。

失敗への恐れ、評価への恐れ、変化への恐れが、人を現状にとどまらせ、行動を抑制します。

このような恐れが強くなると、人は新しい選択や挑戦を避けるようになりま

す。そして、「今のままでよい」「変わらない方が安全だ」と考えるようになるのです。

その結果、人は自ら選んでいるつもりでいても、実際には恐れによって動かされるようになります。

パウロは、「神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」（テモテへの第二の手紙 1 章 7 節）と述べています。

このみ言は、恐れが本来の人間の状態ではないこと、そして信仰によって意志が回復されることを示しています。

ここで言われている「慎み」とは、ギリシャ語（ソーフロニスモス）で自制・節制を意味する言葉であり、感情や衝動に流されることなく、自らを制御する力を指します。

したがって、信仰は衝動に流されることなく、意志と理性を整え、主体的に判断し行動する力を回復させるのです。

#### 4 情性によって失われたものの回復

情性の状態では、人は自ら考えることをやめ、意志を働かせることを避け、行動もまた習慣や周囲の流れに支配されるようになります。

その結果、自分で選択しているように見えても、実際には環境や過去の経験に反応しているだけの状態となります。

しかし、信仰によってこの状態から脱却したとき、再び自ら考え、判断し、選択できるようになります。

つまり、情性によって失われていた思考、意志、行動が回復され、人は外部の影響に流される存在から、自ら考え、選択して生きる存在へと変わっていくのです。

#### 5 神との関係における主体性

では、そのような回復はどこから生まれるのでしょうか。聖書は、その源が神との関係にあることを示しています。

イエスは、「わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない」（ヨハネ福音書 15 章 4 節）と語られました。

ここで重要なのは、「つながる」という表現です。これは受動的にとどまることではなく、自らの意志によって神との関係を選び続けることを意味していま

す。

すなわち、人は神との関係の中で生きることを選ぶとき、初めて惰性や外部の支配から離れ、主体的な生き方を確立していくことができるのです。

ぶどうの木につながった枝が実を結ぶことができるように、この関係は受け取るだけの受動的な状態ではなく、源から力を受けながら成長し続ける能動的な状態です。

これこそが、惰性とは真逆の自ら選び続けることによって生きる姿です。

神につながることによって、人は思考と意志を正しく用いる力を回復し、主体的な選択を続けることができるようになるのです。

## 6 真の自由の確立

前シリーズの「聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅳ」で論じたように、真の自由とは、単に外的な制約がない状態ではありません。

それは、思考と意志が回復され、正しい基準に基づいて自ら選択できる状態です。

惰性は一見すると楽で自由なように見えますが、実際には、自ら考えることをやめ、環境や習慣に従って生きる状態であり、一種の内面的な束縛です。

それに対して信仰は、人を惰性から引き上げ、思考と意志を回復させます。そして神との関係の中で主体的な選択を積み重ねることによって、人は真の自由へと至るのです。

## 第6回 現代社会における誘惑と支配の完成形

これまで私たちは誘惑の構造を段階的に見てきました。

誘惑は外からではなく内面と結びつくことによって成立し、甘言と美辞は承認欲求に働きかけ、失敗と挫折は思考を停止させ、プロパガンダは思考の枠組みそのものを形成し、そして最終的には惰性という形で主体性を奪います。

本章ではこれらを総合し、現代社会において誘惑がどのように複合的な支配の構造として働いているのか、そしてその中で信仰がどのような意味を持つのかを考察します。

### 1 情報社会における支配構造

現代社会の特徴は、情報が絶え間なく流れ込み続ける環境にあります。かつては限定的であった情報源が、今では個人の手の中にあり、常に更新され続けています。

この状況は、一見すると自由が拡大しているように見えますが、実際には、思考が外部の影響を受け続ける構造を強化しています。

SNSをはじめとする情報媒体は、個人の関心や嗜好に合わせて内容を提示します。その結果、自分の考えに近い情報に囲まれ、それが現実の全体であるかのように感じるようになります。

このとき、思考は広がるのではなく、むしろ特定の方向に固定されていきます。この構造は、これまで見てきた誘惑の諸要素を統合したものです。

甘言と美辞は承認欲求を刺激し、繰り返される情報は思考の枠組みを形成し、異なる意見との接触が減ることで、主体的な判断の機会が失われます。

その結果、自分で考えているつもりでいても、実際には外部によって形成された思考の枠組みの中で動いている状態になるのです。

### 2 個人の自由と集団操作の逆説

現代においては「個人の自由」が強調されます。しかしその一方で、思考や行動が集団的な傾向に強く影響されているという現実があります。この二つは矛盾しているように見えますが、実際には同時に成立しています。

たとえば、自分の意思で選択していると感じていても、その選択の基準自体が環境によって形成されている場合、その自由は限定されたものになります。

つまり、選択の自由はあっても、判断の自由が失われている状態だということです。

このとき、支配は外から押し付けられるものではなく、自分自身の考えや判断

として作用するようになります。これが現代における最も高度な支配の形です。

人は支配されていることに気づかないまま、その枠組みの中で生きていくようになるのです。

### 3 聖書が示す終末的視点

聖書は、人間の思考と行動が次第に一つの方向へ統一されていく終末的状况を示しています。

ヨハネは、終わりの時代に人々が一つの「刻印」のもとに統制される状況を記しています。

また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。（ヨハネの黙示録 13 章 16～17 節）

この象徴的表現は、思想的・経済的な統制が広範囲に及ぶ状況を示すものとして理解することができます。

その特徴は、外的な強制だけでなく、内面的な同調が広がることにあります。すなわち、人々が同じ基準、同じ価値観に従うようになる状態です。

この視点から見ると、現代の情報社会は単なる技術的發展ではなく、人間の思考が統一されやすい環境を生み出していると理解することができます。

これは、これまで見てきたプロパガンダや思考形成の構造が、より広範囲かつ深く作用する段階に入っていることを意味します。

### 4 思考をめぐる戦いと信仰の意義

ここで改めて確認すべきことは、これまで一貫して見てきた通り、戦いの本質が思考の領域にあるという点です。行動は思考の結果であり、思考が形成されれば、行動もまたそれによって決定されます。

したがって、現代における誘惑との戦いは、行動を制御することではなく、思考の基準をどこに置くかという問題になります。

どの情報を受け入れ、どの価値観に基づいて判断するのかが決定的な意味を持つのです。

このような状況の中で、信仰は単なる宗教的实践ではなく、思考の基準を回復する働きを持ちます。

詩篇には、「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。」（詩篇

119 篇 105 節) とあります。

神の言葉を基準とすることによって、外部から与えられる情報や価値観をそのまま受け入れるのではなく、それを吟味し、判断することができるようになります。

このとき、人は初めて主体的に生きることができます。すなわち、外部の影響に反応する存在から、自らの基準に基づいて選択する存在へと変わるのです。ここに信仰の本質的な意義があります。

## 5 現代における自由の再定義

現代において自由とは、多くの場合、選択肢の多さとして理解されます。しかし、聖書的観点から見ると、自由とは単に選べるのではなく、正しく判断できることにあります。

もし判断の基準が外部によって形成されているならば、どれほど多くの選択肢があっても、その自由は限定されたものです。

ですから、真の自由とは、思考が神のみ言という基準に基づいて働き、その結果として意志と行動が一致する状態を意味するのです。

## 6 結論

誘惑は人間の欲望や承認欲求、恐れと結びつくことによって内面に入り込み（第1回）、甘言と美辞によってその影響を強め（第2回）、失敗と挫折を利用して思考を停止させ（第3回）、情報環境を通して思考の枠組みを形成し（第4回）、最終的には惰性として主体性を奪います（第5回）。

現代社会における誘惑は、このような複合的な過程を通して、人間の内面から支配を成立させるのです。

しかし、信仰はこの一連の支配の過程に対して、内面から抵抗する力を与えます。この意味において、誘惑との戦いとは、外部との戦いではなく、自分が何に従って生きるのかをめぐる戦いです。

欲望や恐れ、あるいは社会の価値観に従うとき、知らず知らずのうちに支配の中へ取り込まれていきます。しかし、神との関係の中で生きることを選ぶとき、思考と意志は回復され、主体的な選択が可能になります。

そして真の自由とは、自分勝手に生きることではなく、神との関係の中で思考と意志を回復し、自ら選択して生きる主体性の中にあるのです。